

被災施設における一作業療法士の震災後の行動

嶺岸 裕子

介護老人保健施設 はまなすの丘

【はじめに】

東日本大震災により、気仙沼市は地震による強い揺れと、その後の大津波に見舞われ、壊滅的な被害を受けた。介護老人保健施設はまなすの丘（以下、当施設）は小高い丘の上であり、津波による建物の損壊こそなかったものの、ライフラインは全て使用不可となった。当施設に通じる道路は浸水し、帰宅困難となった通所利用者や職員、避難してきた近隣地域住民を受け入れ、当施設は避難所となった。ライフライン復旧の目途が立たず、山形県へ避難することが決定し、様々な方からの支援を受けながら山形県で避難生活を送った。震災発生から気仙沼に帰還するまでの約3ヶ月間、作業療法士（以下、OT）として、一人の人間として、利用者や避難者の方々にできることを考え、実行したことを報告する。

【当施設について】

湖山医療福祉グループは2012年4月1日現在で全国16都道府県、22法人（社会福祉法人、医療法人、事業会社、NPO法人）、144サービス拠点、355事業所、北海道から鳥根県まで全国展開をしている。その中で東北は福島県、山形県、宮城県に展開しており、当施設は平成18年に開設。入所100名、通所35名定員。当時リハビリ職員は理学療法士5名、OT1名、言語聴覚士（以下ST）1名、マッサージ師1名が所属していた。

【震災直後（3/11～3/12）】

＜施設＞地震直後に全てのライフラインが停止。避難者に対して1階の通所フロア、廊下、会議室等を開放し受け入れた。入所97名、通所28名、職員59名、避難者は約150名。

＜行動＞1) 見回りの職員が津波を確認した為、1階の利用者と通所利用者を2,3階に避難させる。
2) 通所の浴室にポータブルトイレを置き、日没後は職員と交代でトイレの誘導、清掃を行った。
3) 避難者に対し、その場で出来る体操を職員と一緒に実施した。

【全入所者移動開始（3/13～）】

＜施設＞震災3日目に全入所者を同グループの山形県にある介護老人保健施設かがやきの丘、川西湖山病院に一次避難することが決定し、避難を開始した。

＜行動＞1) 通所利用者と避難者に折り紙や組みひ

もなどの手作業を実施した。

2) セラバンド体操なども実施した。

3) 19日に山形県への移動が決定し、避難者への体操が継続できるよう後日移動のSTと連携し、手順や内容の確認を行った。

【山形県での生活（3/20～）】

＜施設＞避難先で当施設の入所者の介護を行った。山形県内のグループ外の12施設へ二次避難の受入れ要請をした。

＜行動＞1) 同グループ内の鳥取県や島根県、静岡県などの各施設からの応援職員と共にOTの視点からトイレ介助やベッドの配置を検討した。

2) 応援職員に、独自の日常生活活動表を作成し提供した。

3) かがやきの丘のOTとリハビリの流れを検討し、その場でできることを中心にリハビリを実施した。

4) 見守りが必要な時間を職員と話し合った。

5) 配膳や掃除、レクリエーションを行う際は誘導や手伝いを行った。

【施設の再開（4/25～6/22）】

ライフラインが復旧し、施設の再開が決定。当施設の避難所は4月23日に閉鎖され、入所者は順次、当施設への帰還を開始する。6月22日に最後の利用者が帰還。5月1日には通所も再開し、介護老人保健施設として再稼働した。

【3ヶ月間を通して】

震災直後は情報や連絡手段がなく、混乱した状況で職員として何をしたらよいか判断することが出来なかった。しかし自分自身が今できることを考え、OTとして折り紙や組みひもなどの手作業を提供したことにより、通所利用者と避難者の間に会話が生じ、交流が生まれた。山形ではグループ内の寮や宿泊施設などで避難生活を送りながら、山形県の職員や応援職員と連携を取り合い、必要としている情報を確認しながら仕事を行った。

【謝辞】

介護老人保健施設かがやきの丘、川西湖山病院の皆様、各施設の応援の皆様、二次避難を受け入れていただいた山形県内の各施設の皆様、心より御礼申し上げます。様々な支援を受け、日常生活を送ることが出来る喜びを感じております。支援いただいた全ての皆様に感謝の意を表します。